学び合いによってコミュニケーション力を高める授業の工夫

端　崎　圭　一
英語科　小　川　正　清
三　田　耕　平

1．はじめに

(1) 本校生徒の実態

昨年度英語科では，数回の異学年交流授業を試みた。つくった英文や練習してきたスピーチをグループ内や全体の前で発表する活動を通し，後輩が先輩にあこがれを持ち，先輩がよいモデルとなること，お互いにアドバイスを送り（受け）合うことを通して自己有用感をもたせることができた。しかし，期待していたグループ内で先輩が話しやすい雰囲気づくりをしたり，司会の役割をしたりすることはうまくいかず，グループ内でのコミュニケーションがまだまだ緊張ぎみで，ぎこちなかった。

情報の受け手（同級生や下級生）に合わせて分かりやすく書くことには慣れてきた。すなわち，言い換え，分かりやすい表現の発見，聞き手への質問を交えた文，同じ文を用いない同じ意味の繰り返しなどを用いて書くことには，慣れてきた。(今後もこれを積み重ね，習慣づけたい。）しかし，情報の受け手に合わせて分かりやすく話すことについては，恥ずかしさのあまり声が小さくなったり，気持ちを表情や仕草で表すことが苦手であったり，スピーチの発表の際にぶっきらぼうで，ただ言い放つだけになったり，また間違いを恐れるあまり，原稿に頼ってしまったりという姿が見られた。話す場面になると，聞き手への配慮や分かってほしいという思いよりも，緊張に勝てない，早く終わらせたいといった思いが勝ってしまうようである。(個人→ペア→グループの練習を通して緊張に慣れてからクラス全体の前でスピーチを発表したり，最終発表の集団を小さくしたりする工夫を試みている。）授業中のペアやグループでの話す練習でも，聞き手を意識した活動が不十分な生徒が見られた。

普段の授業の中でも，生徒が英語の質問に答えたり，自分のことを英語で話したりする短い発表の場面があるが，全体に聞こえない小さい声であったり，正しさを求めるあまり，自分の言いたいことを答えるよりも正しい答え方で答えようとする生徒が見られる。(例えば，兄弟が何人かと問われ，隣の生徒に聞いてからでないと答えられない。)全体の前で自分を表現することに恥ずかしさを覚えていたり，間違えたり，変なことを言って友達に笑われたくないという思いが生徒の中にあるのではないか。ここでも，聞き手のことを意識していない姿が見られる。また，どんな答えも馬鹿にせずに受け入れられる人間関係づくり，安心して発表できる場づくり，きちんと聞こうとする聞き手側の優しい態度の育成にも課題が残る。

英語の授業は，まだまだ暖かい人間的なコミュニケーションの場になっておらず，「共に学び合えて」いない姿が見られる。「正しく」とともに，「優しく」理解し，表現するコミュニケーションの場を積み重ね，人間関係を築き，英語の授業を暖かいコミュニケーションの場としていくことが課題である。

(2) これまでの研究経過

昨年度の研究では，今年度と同じ主題「学び合いによってコミュニケーション力を高める授業の工夫」の下，異学年交流授業に取り組んできた。聞き手の年齢や立場に合わせて，話す内容や話し方を変えることを学習してきた。その中で，まだまだ聞き手の存在を意識していない話し方をする生徒の実態が明らかになり，「学び合う」姿から遠く離れた生徒たちの姿にも気付かされることとなった。コ

ミュニケーションの中の情緒的な表現力の不足に気付かされた。授業中の様々な場面の中で，聞き手のことを意識して，生き生きと話す生徒を育成していくことが特に大きな課題となった。

(3) 異学年・異校種間交流授業のねらいと位置づけ

昨年度の異学年交流授業は次のことを主な目的として実践した。

・英語の情報の受け手に合わせて，情報を発信できるようにする。相手に分かる表現を探したり，難しい単語を言いかえたりする力を養う。ジェスチャーなど，ことば以外のメディアも使って何とか相手に情報を伝える力を養う。

・上級生が実際の経験やこれまで学んできたことを下級生に伝えることにより，これまでの学習の成果を実際に活用することができるようにする。

・下級生が上級生から学ぶことにより，具体的な目標やあこがれを持ち，意欲的に学習に取り組むことができるようにする。

今年度は，小学校との異校種間交流授業を初めて試みることになったが，発達段階の大きく異なる集団同士の交流授業をすることにより，生徒にとってはさらに大きな障害が増え，それを乗り越えることにより，さらに深い学び合いが期待できると考えた。

大きく年齢の隔たりがある他者との関わりにおいて大切なものは，相手の話を聞いてあげようとする思いやりの気持ちや，話しやすいようによい雰囲気をつくったり，言葉やそれに伴う表情などによって，相手の発話を導き出したりすることである。他者理解力の中の情緒的な面をさらに伸長させることができるのではないかと考え，以下の目的を加えた。

・受け手として，英語の情報の発信者が，情報を伝えやすい雰囲気をつくったり，相手から情報を導き出したりできるようにする。ジェスチャーや表情など，ことば以外のメディアも使って円滑に相手から情報を引き出す力を養う。

異学年交流や異校種間交流授業では，上級生が下級生と同じ年齢の頃を思い出し，今は簡単にできることでも，下級生にはできないことを認識しつつ，コミュニケーションを続けなければならない場面が生まれる。そのような場面では，例えば下級生が正確でない表現を使っていても，上級生は下級生がどういうことを言いたいのか，あるいは言外の意味をとらえて推測し（知的コミュニケーション），「それでいいよ。」と認めてあげる情緒的コミュニケーションの力を求められる。今回の異校種間交流授業では，そのような場面の中から生徒の深い学びが得られるのではないかと考えている。

以下に，各学年の取り組みと小学校との異校種間交流授業について詳しく述べていきたい。

2．1年生の実践

昨年度，英語科では「共に学ぶ生徒の育成を目指して」という主題の下，異学年交流授業の実践を試みた。授業の参観者からは，異学年交流授業をすることで生徒の表現力や理解力が伸びる場面は確かに認められるが，普段の授業において，もっと共に学ぶ基礎的な部分を育てていくことも重要ではないかという指摘を受けた。そこで，今年度，1年生では，グループ活動を中心に，普段の授業で共に学ぶ姿勢とコミュニケーション力を育成する方法を模索することにした。

1年生のグループ活動では，認知心理学でいうところのメタ認知的活動を重要視した。グループ活動で生徒が相互に指摘し合うことで，認知についての気づき（ここがわかっていない），点検（この解き方ややり方でよいのか），評価（この考え方ややり方が面白い）をモニタリングし，力を伸ばしていくことを期待した。

(1) グループ活動に慣れる（１回目）

まず，４月，生徒が中学生として新鮮な気持ちを持っている間に，グループ活動に慣れさせることを目的とした活動に取り組ませた。グループは４人で構成し，生徒同士が互いに英語らしい発音ができているか否かを指摘し合い，英語らしい発音にできるだけ近づけようという活動である。英語らしい発音についての材料は，関西大学教授　靜哲人　教授著『English あいうえお』を参考にさせていただいた。発音指導は，日本語の音を意図的に英語の音に変えて言ってみることで，英語と日本語の音の違いを生徒に意識させる指導である。日本語が聞き慣れない音に変化するということは，生徒の興味を惹いてグループ内では楽しく学び合っていたように感じた。ところが，グループごとに成果を最終発表したときに，恥ずかしいという思いがあったのか，スムーズに発表できたところとそうでないところが大きく分かれた。全体の前で発表するということに，生徒たちはいかに抵抗感を持っているのかがうかがえた。

(2) 『知人に友人を紹介しよう』（２回目）

５月中旬実施。教科書の「友だちを紹介できるようにしよう」の発展的活動として，生徒がお互いを紹介するグループ活動に取り組ませた（資料１参照）。１回目のグループ活動同様，グループは４人で構成し，活動の最終段階では，会話をビデオ撮影して自己評価をした。取り扱う会話では，３人が登場するが，生徒がすべての役割を行わなければならないように工夫した。また，会話には決まったセリフとブランクになっている部分があって，グループ内でブランクの部分をアイディアを出し合って考える活動を盛り込んだ。仲間とセリフを作ったことについての生徒の感想をいくつか挙げてみたい。

・今までならったことをすべて出すためには，たくさんの意見があるといいので，みんなの意見をきくというのが，一番大事だと思います。
・プラスな発言（「それいいんじゃん」とか「もっとこうしたらいいんじゃない」）をしていく
・相手がいやがるようなことを強要せず，相手の立場に立ち自分なりの意見を出す。
・自分の気持ちをしっかり言う。相手の話を聞く。
・自分の意見を言うだけじゃなくて，他の人の意見も聞く。
・自分の意見は出さないといけないけれども，出しすぎると今度は逆に自分勝手になってしまうから他の人の意見もとり入れること。
・相手の意見をしっかり聞き，受け入れた上で自分の意見を言う。
・自分のわからないことを言ってみたらくわしく教えてもらえてうれしかった。
・意見が分かれた時があって，その時，強引に決めてしまったので，少しでもいいから，相手の事をきいてあげなくてはいけないと思った。
・互いに意見を尊重しあいながら，一人で話を進めずにグループ全員で話を進める。ただし，違うところは違うと教えてあげる。
・意見の出しやすいふんい気をつくったり，わからないところを聞けたり教えたりできる関係も大事だと思います。
・相手のことを思いやり，みんなの意見を聞くことが大切だと思う。自分の意見を出しながら，他の人の意見もしっかりと受けとめると，スムーズな話し合いが進められる。
・仲間の立場を考えてあげる。（例　英語が苦手なら教えてあげるとか…。）

感想に目を通すと，グループ活動をするに際して，大多数の生徒が相手の立場や意見を受け入れつつ自分の意見を述べていくことの重要性を認識している。ただ，生徒の様子を観察していると，認識していることとそれを実際に行動に移すことにおいては，皆ができているとは思えなかった。この部分をしっかりと育てていきたいと考えた。

(3) 『先生を紹介しよう』（3回目）

“He” や “His” などの三人称の人称代名詞を学習した後，6月下旬から7月上旬にかけて『先生紹介をしよう』というスピーチ活動を行った。まず，先生紹介の作文を行った後（資料2参照），それをもとにスピーチの練習をしたのであるが，その際に，4人一組のグループで活動を行った。

学校でのスピーチ活動は，クラスメート全員の前でいきなり話すことが多いと思われるが，これは，生徒にとっては最初から高いハードルを飛び越えなければならないことと同じで，とても緊張を強いられる。そこで，本校では，数年前から，グループ内でスピーチ練習を行うことで，緊張感を和らげてリラックスした状態でスピーチに取り組ませる試みをしている。今回もその手法を取り入れて，練習をおこなった。その際に，いくつかの観点について仲間のスピーチの態度を評価することで，相互の力をアップすることを試みた（資料3参照）。

こうした練習を積んだ後，生徒は，初めてクラスメート全員の前で話すことにチャレンジするのであるが，その前段階として，一つ上の学年の生徒による先生紹介をDVDで視聴させた。スピーチに際して，教師のモデルを見ることは，スピーチの個々のテクニックを知る上で重要なことであるが，それに加えて先輩の行うスピーチをモデルとすることは，スピーチを行うモチベーションの点において重要なことであると考えたからである。実際，様子を観ていると，ほとんどの生徒がDVDを身を乗り出すようにして観ていた。先輩は生徒にとって教師よりも身近な存在であり，その先輩が懸命にスピーチに取り組む姿を，生徒という同じ目線で見ることで，「先輩がジャスチャーをいれている」「先輩の発音はすごい」などたくさん良い刺激を受けたようである。なお，このDVD視聴の試みは，昨年度，取り組んだ異学年交流の別のアプローチであると考えている。

さて，スピーチであるが，資料4にあるように，生徒全員に，一つのスピーチが終わるたびに4つの観点で評価をさせるようにした。漫然とスピーチを聞くだけでは，集中力はしだいに落ちてくる。しっかりと聞く姿勢作りにはこの方法は欠かせないと考え，今までの実践の中で取り入れてきているものである。そして，今年度，4つの観点に加えて，「共に学ぶ姿勢」の育成を意識し，「ここが良い（がんばる姿）」という項目を入れて書かせることにした。生徒が「共に学ぶ」ときには，必ず生徒同士の間で様々な感情が生じると考える。三浦（2006）に引用されている，A.H.マスローやD.P.オースベルの考えをもとに言い換えると，「共に学ぶ」ときには，人間の基本欲求である「承認の欲求」や「人から受け入れられ賞賛されたい欲求」が満たされることを生徒たちは望んでいるはずである。自分のスピーチが仲間にどのように受け入れられているのだろうという気持ちが起こったときに，○や×などによる評価で自分の改善点を見つけ出すことに加えて，「ここを認めてもらっている」という安心感を生徒に持たすことは大切なことではないだろうか。そこで，スピーチ活動が全て終わり評価表も書き終えた段階で，机上に自分の評価表を置かせたあと，自分がどのように評価されたのかを見て回る時間をとった。

「ここが良い（がんばる姿）」の欄そのものは狭いのであるが，生徒たちは仲間の長所を上手にとらえコンパクトに記述していた。「声がハキハキしている」「つまってもあきらめなかった」「イントネー

ション○」「いわかんなし」「笑顔でいっていた」など仲間を上手に励ましたり勇気づけたりしていて大いに感心させられた。

上記の３つの活動のあと，11月には別のグループ活動を通して「共に学ぶ生徒の育成」を進めて生きたいと考えている。異学年・異校種間交流授業が「ハレ」の授業だとすると，普段の授業は「ケ」の授業。この「ケ」の授業を通して共に学ぶ風土を作りながら，「ハレ」の授業で真価を発揮できるようになればと願っている。

知人に友人などを紹介してみよう！（評価表 提出用）

1年＿＿組＿＿番＿＿＿＿＿＿

①自己評価（３回目の練習の後）

それぞれの役割を演じたときの，自己評価を下の観点を使ってしてみよう。

4…よくできた　3…できた　2…あまりできなかった　1…できなかった

	アイコンタクト	相手に聞こえる声の大きさ	ジェスチャーや握手	心を込める
A-san の時	4 (3) 2 1	(4) 3 2 1	4 (3) 2 1	4 (3) 2 1
B-san の時	4 (3) 2 1	4 (3) 2 1	(4) 3 2 1	4 (3) 2 1
C-san の時	4 (3) 2 1	4 3 (2) 1	(4) 3 2 1	4 (3) 2 1

②上の自己評価を受けて，ビデオ撮影に入る前に，どのようなことに気をつけてみようと思いましたか。

まず１番気をつけようと思ったことは，アイコンタクトやジェスチャーなど。
相手とのコミュニケーションが大切だと思ったから。

③自己評価（ビデオ録画を見た後）

	アイコンタクト	相手に聞こえる声の大きさ	ジェスチャーや握手	心を込める
A-san の時	4 (3) 2 1	(4) 3 2 1	(4) 3 2 1	4 (3) 2 1
B-san の時	(4) 3 2 1	(4) 3 2 1	(4) 3 2 1	4 (3) 2 1
C-san の時	(4) 3 2 1	(4) 3 2 1	(4) 3 2 1	4 (3) 2 1

④上の自己評価を受けて，改善できたところ，もっと改善したいところをあげて，その理由やこれからの自分の心構えを書いてみよう。

改善できた点・改善したい点	理由やこれからの心構え
[例]・アイコンタクトがしっかりできた。	練習中から意識したし，他のグループのものが参考になったから。
[例]・心をこめて話すことができなかった。	原稿に頼ってしまった。次は，もっと練習してせりふを自分のものにしたい。
・心をこめて話すことがあまりできなかった	きんちょうしてしまい，原稿どおりに読むので精一杯だったから
・声を相手にきこえるぐらいの大きさで言えた	大きさだけでもしっかりしようと意識したから
・アイコンタクトができた。	アイコンタクトは，あまり普段意識してないけど今回は意識してみたから

⑤今回，グループでセリフを考えましたが，その際，仲間と話をしながら進めました。仲間との話を進めていくために，大切だと思うことを書いてみよう。

意見が分かれた時があって，その時強引に決めてしまったので，少しでもいいから，相手の事をきいてあげなくてはいけないと思った。

資料１

より良い話し方を目指して

1年＿＿組＿＿＿番　名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

☆前回，友達紹介をビデオで撮影しました。その時の経験を思い出しながら，より良いものにするために，今日一日，自分の練習，グループでの練習に取り組んでみましょう。

紹介などのスピーチをするときに重要なことは，聞き手のことをどれだけ意識して行なっているかです。以下の項目について，自己評価，および，スピーチをしている友人の評価をしてあげよう。

①声の大きさは良いか　…部屋の大きさや相手との距離を考えて声の大きさを出しましょう。

②聞きやすいスピードか　…いくら英語が得意といって勢いに任せてべらべらしゃべっても，分かってもらえないと悲しいものです。聞き手の聞きやすいスピードを意識して話しましょう。

③聞き手の目を見ながら話をしているか　…目を見て話すことで，話し手の心が伝わります。聞き手が自分の言っていることを理解してくれているかを知るには，聞き手の目を見ながら話すのが一番です。ビデオ撮影の場合は，カメラです。

④話しの途中に日本語を用いていないか　…目の前にいる人達は，日本語が分からない人たちばかりという想定です。スピーチ中に詰まってしまって日本語でつぶやくと，聞き手に不安感を与えるものです。詰まっても日本語を用いないで，"Well ...." "Umm ...." "Let me see ...."などと話を上手につなぎましょう。

評価は以下の記号を用いて行ないましょう。

◎…たいへんよい　○…よい　△…もう少し頑張るとよい　×…かなり頑張ってほしい

[STEP 1：自分での練習]

項目 / 評価者	声の大きさは良いか	聞きやすいスピードか	聞き手の目を見ながら話をしているか	スピーチ中に日本語を用いていないか
	○	○	×	△

[STEP 2：グループ内での練習（1回目）]

項目 / 評価者	声の大きさは良いか	聞きやすいスピードか	聞き手の目を見ながら話をしているか	スピーチ中に日本語を用いていないか
	◎	○	×	×
	○	○	×	×
			×	×

[STEP 3：グループ内での練習（2回目）]

項目 / 評価者	声の大きさは良いか	聞きやすいスピードか	聞き手の目を見ながら話をしているか	スピーチ中に日本語を用いていないか
	◎	○	△	×
	◎	◎	△	×
	○	○	△	×

資料 3

先生紹介（ビデオ撮影付き）

☆ 担任の先生と他のクラスの担任の先生一人を選んで（合計二人），英語で紹介してみよう。データは下のものを参考にしよう。ビデオ撮影は，どちらかの先生を選ぶかは自分で決めてください。

[担任の先生（全員共通）]　＜　先生＞

写真をさしながら名前を紹介	This is Mr. Koyama.
何の教科の先生なのかを言う	He is a social studies teacher.
出身地をいう	He is from Hakusan, Ishikawa.
年齢をいう（分かれば）	He is 35 years old.
何かのファンであることを言う	He is a fan of The Chunichi Dragons.
お気に入りのタレントを言う	His favorite personality is Juri Ueno.
お気に入りの色（または季節）を言う	His favorite color is blue.
お気に入りの食べ物を言う	His favorite food is sushi.
どんな先生かを言う	He is a good teacher

[他のクラスの先生]　＿＿＿＿＿＿先生

写真をさしながら名前を紹介	This is Mr. Omote.
何の教科の先生なのかを言う	He is a P.E. Teacher.
出身地をいう	He is from Nonoichi, Ishikawa.
年齢をいう（分かれば）	He is 43 years old.
何かのファンであることを言う	He is a fan of movies.
お気に入りのタレントを言う	His favorite personality is Masami Nagasawa.
お気に入りの色（または季節）を言う	His favorite season is summer.
お気に入りの食べ物を言う	His favorite food is Thai food.
どんな先生かを言う	He is a nice teacher.

先生方のデータ

	Mr. Koyama	Ms. Shimizu	Mr. Tatsumi	Mr. Omote
教　科	social studies	Japanese	science	P.E.
出身地	Hakusan, Ishikawa	Kanazawa, Ishikawa	Kanazawa, Isikawa	Nonoichi, Ishikawa
年　齢	35	16	–	43
何かのファン	The Chunichi Dragons	Kishidan（気志團）	nature（自然）	movies
personality（タレント）	Juri Ueno	Jung Woo-sung（チョン・ウソン）	–	Masami Nagasawa
favorite color	blue	yellow	blue	blue
favorite food（食べ物）	sushi	chocolate	yakitori	Thai food（タイ）
favorite season	summer	summer	winter	summer

どんな先生かをいうときに使える語

cute / kind (　　) / friendly (　　) / beautiful (　　) / cool (　　) /
handsome (　　) / strict (　　)

裏にはヒントがありますが，見るか見ないかは自分で決めてください。

資料 2

先生紹介　クラス評価表

評価は以下の記号を用いて行ないましょう。　　1年＿＿組＿＿番　名前＿＿＿＿＿＿

◎…たいへんよい　○…よい　△…もう少し頑張るとよい　×…かなり頑張ってほしい

		声の大きさ	話すスピード	アイコンタクト	日本語使用しない	ここが良い（がんばる姿）
1101		○	◎	○	◎	[illegible]
1102		◎	○	○	◎	[illegible]
1103		◎	◎	○	◎	[illegible]
1104		○	◎	○	◎	[illegible]
1105		◎	◎	○	◎	[illegible]
1106		◎	◎	○	◎	[illegible]
1107		◎	○	○	◎	[illegible]
1108		◎	◎	○	○	[illegible]
1109		○	◎	○	◎	[illegible]
1110		◎	◎	○	◎	[illegible]
1111		◎	○	◎	◎	[illegible]
1112		◎	○	○	◎	[illegible]
1113		◎	◎	○	◎	[illegible]
1114		○	◎	○	◎	[illegible]
1115		○	○	○	◎	[illegible]
1116		◎	◎	○	◎	[illegible]
1117		◎	○	○	×	[illegible]
1118		○	◎	○	○	[illegible]
1119						
1120		◎	○	○	△	[illegible]
1121		○	○	○	◎	[illegible]
1122		◎	◎	○	◎	[illegible]
1123		○	◎	○	◎	[illegible]
1124		○	◎	○	◎	[illegible]
1125		◎	◎	○	◎	[illegible]
1126		○	○	○	○	[illegible]
1127		◎	○	◎	◎	[illegible]
1128						
1129		○	◎	○	◎	[illegible]
1130		○	◎	○	◎	[illegible]
1131		◎	◎	○	◎	[illegible]
1132		◎	◎	○	◎	[illegible]
1133		◎	◎	○	◎	[illegible]
1134		○	◎	○	◎	[illegible]
1135		◎	◎	◎	○	[illegible]
1136		◎	◎	◎	◎	[illegible]
1137		○	◎	◎	◎	[illegible]
1138						
1139		◎	◎	◎	◎	[illegible]
1140		◎	◎	○	○	[illegible]

資料 4

参考文献

森　敏昭　中條和光（編）2005　認知心理学キーワード　有斐閣　158－159

米国学術研究推進会議　編著　森　敏昭・秋田喜代美　監訳　2002　授業を変える　北大路書房

三浦　孝　中嶋洋一　池岡　慎　2006　ヒューマンな英語授業がしたい！　研究社

金沢大学教育学部附属中学校　研究紀要第48号　平成17年

3．2年生の実践

2学年は昨年度，コミュニケーション力，表現力を養うために「相手にわかりやすく伝える」ことを目標とし，読み，会話，発表などの場面において，以下の基本的な事柄を意識するよう，指導を続けた。

・相手とアイコンタクトをとる。

・はっきりと，大きな声で，早くなりすぎないように話す。

・ジェスチャーを交えて話す。

基本的な事項ながら，今年度になっても上記の3つの基本的な姿勢が定着したとは言い難いのが現状で，これらの指導を継続して行う必要がある。

さらに，今年度は上級生という立場で，下級生と英語を学ぶ機会として，選択英語の履修者と小学校4年生による交流授業を7，10，11月にそれぞれ1回ずつ行う計画を立てて，いかに「小学生にわかりやすく伝える」ことができるか，という課題に取り組ませた。

(1) 第1回交流授業（7月10日）について

上記の小学校4年生と中学校2年生の選択英語を履修している生徒間での交流授業の1回目を行った。

目標として以下の3点を掲げた。

[1] 小学生にわかりやすく伝える。

[2] 小学生の心情，意向を考えながらコミュニケーションを図る。

[3] 小学生にとって「中学生はすごい，あんな風になりたい」と思われるように活動する。

題材は「"I want to ～" という表現を用いて，自分がしたいことを話す。」としたが，表現があまり広範囲になると，小学生に取って負担が大きい学習活動になると思われたので，「夏休みに動物園に行く」という場面設定を行い，動詞を see, eat, drink の3つに絞った。

授業者としては，以下の点に留意して授業を行うこととした。

[1] 初対面の緊張感をほぐし，和やかな雰囲気を作るためのアイスブレーキングは不可欠である。

[2] 絵などを豊富に使い，視覚的に理解を促す。また，小学生には文字による指導はほとんど行わない。音声指導を重視する。

[3] 対応できない，もしくは困っている中学生にすぐに答えを与えるのではなく，ヒントを与えながら考えさせる。

7月現在，2年生は，決まったことを決まった形式で話すことには抵抗はないが，相手の様子，反応を見ながらそれに応じて話すということにはまだまだ慣れておらず，力不足という感は否めない。また，下級生を引っ張って活動していくという経験は，授業中においては全くなく，部活動で後輩の指導をするときなど，限られた場面だけにとどまっていた。そこで今回の授業では「チャレンジする」という気持ちと，「まずコミュニケーションをしっかり取ってくる，英語でどうしてもコミュニケーションが取れなければ日本語を使ってしまっても構わない」と言うことを事前に話してから臨ませた。以下に指導案を示す。

英語科　交流授業（中学２年１・２組(選択英語)／４年３組）　学習指導案

平成19年７月10日（火）
第５限　小学校ランチ・ルーム
指導者　小川　正清／乗富　章子

１．題材名　　夏休みに何したい？

２．目　標

（小学４年生）

・これまでに学んだ表現を用いて，英語で話すこと・聞くことに慣れる。
・初めての中学生との英語を使っての talking に気持ちよく参加しようとする。
（自分の事を英語で，何とか中学生に伝えようとする。友達と助け合う。）
・中学生に習って“I want to 動詞 ….”という表現に慣れる。

（中学２年生）

・初歩的な英語を用いて，自分の考えや気持ちなどを聞き手に正しく伝えることができる。
・初歩的な英語を聞いて，話し手の意向など心情を推し量りながら理解できるようにする。

３．評価の観点及び規準

①コミュニケーションへの関心・意欲・態度
・物おじせず，素直な態度で中学生に接しようとしている。（小学４年生）
・人に頼ることなく積極的に小学生に話しかけ，相互に理解しようとしている。（中学２年生）

②表現の能力
・分からないところをはっきりと相手に伝え，自分のできる範囲内で自分の事を相手に英語で伝えようとする。自分のできることであれば，積極的に友達を助けようとする。（小学４年生）
・英語のつなぎ言葉を用いて，小学生に分かりやすく適切に話すことができる。（中学２年生）

③理解の能力
・中学生の話す英語のおおまかな内容を理解できる。（小学４年生）
・自分の伝えたいことを自己決定し英語で話す内容に置き換えることができる。（小学４年生）
・小学生が伝えようとすることを理解し適切に応じることができる。（中学２年生）

４．指導にあたって

【題材観】

（小学校）

４年生になってから，“I can see a panda.”の基本表現を学ぶために，動物の言い方（単語）や，動物園の設定には馴染んでいる。“I want to ….”については，基本表現としては学んでいないがＡＬＴとのやりとりの中で“I want ○○.”と名詞を次につける形には触れている。本時でも“I want monkey.”のように言うことが予想される。そこで，中学生にやさしく“I want to see a monkey.”と正しい表現の仕方を教えてもらいたい。その経験が，クラスの英語の授業で“I want to … .”に出会った時に本当に理解できるものと期待する。

（中学校）

夏休みを間近に控え，本題材は，児童・生徒にとってイメージしやすい題材であると思われる。発達段階の異なる児童・生徒でも共通して取り組めるであろう。また，言語材料となる“I want to … .”を基にする英文は，自分の気持ちを表すのに有用かつ直結する表現であることから，学習意欲の喚起にもつながると期待できる。

活動の中では，「夏休みに動物園に行こう」という場面設定をおこなうが，動物園で想定できる活動の流れを大切にしながら，“I want to see …．”“What do you want to see?”“I want to eat …．”“What do you want to eat?”などの表現を導入し，使用させていきたい。この活動は，相互の意向をたずね合いながら進めることになるが，週1時間しか英語に触れていない小学生に対して，先輩である中学生が，相手の英語力や心情をどこまで推し量りながら，触れ合うことができるのかがポイントとなる。

【児童観・生徒観】

(小学校)

ア　児童の既習事項の定着度，児童の興味・関心・意欲

上記題材観と同じ。定着は期待できない。英語には大変興味がある。が，自信がなく自分の思いがあっても曖昧な発音でしか言おうとしない。耳に入る通りに発音するのでそれらしく聞こえるが，実はひとり一人はとってもいいかげん。一方で英語をよそで習っていて，自分は英語がよくできる，ペラペラに話せると勘違いしているこどもも若干数存在する。単語はよく覚えている。“I can see a panda.”を「私はパンダを見ることができます。」ときちんと直訳する。

イ　題材に関する知識・技能

動物に関する単語は十分知っている。ポスターやテキストを見て，十分答えられると予想する。

ウ　「共に学ぶ」「コミュニケーション力」についての生徒の実態

コミュニケーション力は，日本語，英語に関係なく，ほぼついてきているが，初対面の中学生に対して，どこまで心開いて話そうとするかは予想できない。本時までにこどもの心をほぐそうと考えている。理想は，授業者である小川先生が，単独で一度こどもと出会う機会があったらと思ったのですが。

(中学校)

ア　生徒（個人／学年）の既習事項の定着度，生徒の興味・関心・意欲

既習事項については，基礎的な事項はおおむね定着しているものと思われる。ただし，関心・意欲には個人差があり，関心・意欲が低い生徒は「場面に応じて適切に話す」ことなどが不得手である。小学生とふれ合いながら言語活動を進めるなかで，少しでも自ら積極的に小学生をリードし，コミュニケーションを取らせたい。

イ　題材に関する知識・技能

今回は使用する動詞の数が限られているので，自分たちで理解し，話すことはそう難しいことではないと考える。また，動物の名前も1学期中に1度言語活動の中で使用しており，その復習になるため，定着に不安はあまりない。ただし，それらの事項を「小学生にわかりやすく伝える」となると，中学生にとっては未知の体験となるため，大いにとまどうことが予想される。授業者としては中学生がそのとまどいをどう乗り越えるか，ということの重要性を理解させ，支援をしていきたいと考えている。

ウ　「共に学ぶ」「コミュニケーション力」についての生徒の実態

普段の授業ではペア活動が多く，班活動をする機会はそう多くない。今回の交流授業は，班活動をメインとし，基本的には中学生2人につき小学生3～4人としたい。少人数における英語での会話には多少慣れているが，活動や話す題材によってはコミュニケーションが十分に図れないこともある。決まったことを与えられた上で相手と話す，という場面においては力を発揮できても，相手の様子を見て，考えながらその場に応じて話す，という力はまだまだついておらず，今回の交流でいかに「場や相手に応じた話し方」ができるか，意識させたい。

【指導観】

(小学校)

3回の交流授業で，児童および生徒につけたい力は何か。何を学ばせたいか。その展望を持つことが何より大切であると考える。

英語の力の差は歴然としている。小学生にとって得るところは大きい。でかくて恐いだけの存在が急に身近に感じられ，以後尊敬の念を持って彼らを見ることになるだろう。

中学生も，今回の交流をもとに，何かを学んでほしい。それは，小学生等自分以外の人に対する思いやりばかりでなく，英語そのものへの自己啓発の機会と捉えてほしい。たとえば，小学生が「○○○って英語でなんて言うの？」と尋ねた時，知らなくて答えられない場面を想定する。「おしっこにいきたい」「あれ，買って」「まいごにならないでね」などの表現は，彼等はとっさに出てくるだろうか。そういう質問に会った時に，自ら辞書を引いて調べ，答えようとするような姿を期待したい。

「動物園へ行く」という設定で，すぐ“I want to see ….”にならないのが小学校の英語である。

「動物園へ行こう！」“Let's go to the zoo!”次に，どんな英語が考えられるのか，と予想してほしい。小学生にも予想させたい。さあ，連れていってくれるのは中学生のお兄さん，お姉さんだよ，のどがかわいたよ，って言えばジュース買ってくれるよ，おなかもすくだろうね，おかあさんと待ち合わせの時間は何時だっけ？

グループごとに様々な設定をし，英語で話し合いながら動物園を楽しむことができるような活動を期待している。

(中学校)

本時は，小中学生ともに初めての交流授業となる。双方とも緊張することが予想される。特に小学生は，主となる授業者が中学校の教員ということもあって，授業の進め方にも戸惑いを持つと思われる。今まで小学校の授業を参観させてもらったことを思い出しながら，中学校の教員は，具体的な絵を用いるなどして，緊張感を和らげていきたい。

小学4年生と比べると，中学2年生は，知力・体力ともにかなり進んでいると思われる。今回の学年差を考えたとき，昨年，異学年交流で懸念された学力の逆転現象については，問題視しなくて良いと思われる。よって，活動に関しては，精神的にも余裕を持って取り組むことができるであろう。「お兄さん」「お姉さん」的な存在として，小学生と触れ合えるように励ましたい。そして，このような交流から，自己有用感を得ることができ，さらなる英語学習への意欲とさせたい。

5．指導計画及び評価計画（総時数3時限）

			評価計画
第一次	夏休みに何したい？ 【本時】	(1時間)	①
第二次	計画中（10月実施）	(1時間)	①②③
第三次	計画中（11月実施）	(1時間)	①②③

6．本時の学習（第1次中の1時）

(1) 題材名　夏休みに何したい？

(2) ねらい

(小学4年生)

・これまでに学んだ表現を用いて，英語で話すこと・聞くことに慣れる。

・初めての中学生との英語を使っての talking に気持ちよく参加しようとする。
(自分の事を英語で，何とか中学生に伝えようとする。友達と助け合う。)

・中学生に習って“I want to 動詞 ….”という表現に慣れる。

(中学2年生)

・“want to ～” などの初歩的な英語を用いて，自分の考えや気持ちなどを聞き手に正しく伝えることができる。

・“want to ～” などの初歩的な英語を聞いて，話し手の意向など心情を推し量りながら理解できるようにする。

・人に頼ることなく積極的に小学生に話しかけ，相互に理解しようとしている。

(3) 評価の観点及び規準

(小学4年生)

①コミュニケーションへの関心・意欲・態度

・物おじせず，素直な態度で中学生に接しようとしている。

②表現の能力

・分からないところをはっきりと相手に伝え，自分のできる範囲内で自分の事を相手に英語で伝えようとする。自分のできることであれば，積極的に友達を助けようとする。

③理解の能力

・中学生の話す英語のおおまかな内容を理解できる。

・自分の伝えたいことを自己決定し英語で話す内容に置き換えることができる。

(中学2年生)

①コミュニケーションへの関心・意欲・態度

・人に頼ることなく積極的に小学生に話しかけ，相互に理解しようとしている。

(4) 「共に学ぶ」「コミュニケーション力」(他者理解力・自己表現力)育成に関する学習活動について

附属小，中学生ともに初めての交流授業であり，たとえ多少の面識はあったとしてもお互い緊張し，ぎこちなさが見られるであろう。中学生が最初のあいさつからいかに親しみを持って関わり，互いの緊張感を解くかが課題である。そして，小学生が “I want to see ～.” という表現を用いて発表するために，中学生がどれだけしっかりと教え，導くことが出来るかがポイントとなる。

中学生にとって，相手に伝えるためにはどんな事が必要なのかを学ぶ場になればよいと考えている。

(5) 本時の展開

学習活動・内容	教師の指導・支援及び留意点	評価規準および方法	時間
1．全員で挨拶をする。	・小学校と中学校の双方の教師が，今日の交流授業の趣旨を日本語で簡単に説明する。		2
2．自己紹介（アイスブレーキング）をする。	・中学生が小学生をリードするように促す。 ・自己紹介が活動のメインにならないように簡潔に切り上げる。		3
3．夏休みに行きたい所を考え発表する。 (1) 夏休みに行きたい所を考え，言う。	・ジェスチャーを交えながら，小学生に理解できるように，ゆっくり話し，“I want to ～.” という文形を導入する。 ・動物園の絵を示し，楽しい雰囲気を作る。		3
4．活動に使う語の練習をする。 (1) 夏休みに動物園に行くという設定のもと，動物名の英語を練習する。 (2) 動物園で食べるもの，飲むものの名前の練習をする。	・動物や食べ物，飲み物などを絵を用いて提示する。その際，既習の “What's this?” などを用いてクイズ形式にし，練習が単調にならないようにする。 ・発音が難しい語については丁寧に，ゆっくりと繰り返すようにする。		12

(3) "I want to see …." "I want to eat …." "I want to drink …." の練習をグループでする。	・中学生が小学生のモデルになるように，発音やイントネーションについての意識を高めるような助言をしてから練習をさせる。	〈関心・意欲・態度〉 ・人に頼ることなく積極的に小学生に話しかけ，相互に理解しようとしている。	
5．グループになって，動物園で見る動物を選ぶ。 (1) "I want to see …." を使って，動物の中から5つを選ぶ話し合いをする。 (2) "I want to see …." を使って，(1)で決まったことを全体の前で発表する。	・ここでも中学生が小学生をリードするように促す。文法的な誤りにこだわらずに，小学生の意向を汲み取るようにして活動するように助言する。 ・中学生には，日本語を使わないように促す。小学生には，オールイングリッシュでにこだわらず，言い方が分からないときには，中学生にたずねるように助言する。 ・1人1文は必ず発表するようにする。もしクラス内に落ち着きがなければ，発表する人の英語を静かに聞くよう注意を促す。	[観察]	15
6．グループになって，動物園内の飲み物，食べ物コーナーで飲み物，食べ物を受け取る。	・中学生のリードでそれぞれグループ毎にまとまってお店に行き，小学生がうまく活動できていなければ，中学生が小学生をサポートする。 ・時間が余るようなら，もう一度違う食べ物，飲み物を頼みに行くなどする。		5
7．グループ内で本日の感想を述べ合い，ふりかえりをする。	・中学生が司会，記録をするよう指示する。		4
8．全員で挨拶をする。	・10月と11月に，交流授業があることを予告する。		1

授業後の反省と今後の課題

授業最初のアイスブレーキングはうまくいき，小学生の緊張が解け，ある程度和やかな雰囲気を作ることができた。

しかし授業を全般的に見ると，授業内容が予想以上に小学生にとって簡単すぎたようで，小学生にとってsomething newがなく，中学生にとっても「わかりやすく話す，教える」と言う場面が少ない，ほとんど学びがない授業になってしまった。

また，中学生に対して，日本語の使用規制をあまり厳しくかけていなかったので，英語で言えることも日本語で言ってしまう生徒が多くいた。その結果，英語でのやりとりが少なくなってしまった。とにかくコミュニケーションを図ることができれば多少日本語を使用してもやむを得ないかと授業者も思っていたので，この点は，大いに反省している所である。そのことも，小学生にとって「何だ，この程度か」という思いを持つ原因になってしまい，（資料5参照）小学生側から見ても「さすが中学生」と思うような場面はほとんど作ることができなかった。

もう一つの反省点として，小学校の先生との打ち合わせが不足しており，小学校の先生にも授業に参加してもらう場面が少なくなり，授業がやや単調になってしまったことが挙げられる。たとえば小学校の先生から中学生に「小学生が分からない表現をどんどん使ってみてもいいので，とにかく英語をしっかり多く話してほしい。」などというように，小学校の先生に強調すべきことを話してもらう場面を設定しておけば，特に中学生は高い意識で授業に参加していたように思われる。また，中学校教師が小学生

の英語力をあまり把握せずに，低く見過ぎていたことが分かった。事前に中学生や中学校教師が話す内容を小学校の先生にチェックしてもらっておけば，授業で使う英語の難易度を前もって上げることは可能だった。実際に，小学生の英語の発音が中学生のカタカナのような発音よりもきれいだったというような逆転現象が見られ，授業者としてはこのことも大いに反省すべき点となった。

授業者は以下のことを強く意識して授業を進めるべきであった。

・小学生が理解に困り，中学生の助けを必要とする場面を設定する。

・中学生がいろいろ考え，工夫しながら，英語で小学生にアドバイスを与える場面を設定する。

しかし実際には，小学生が困ることなく理解し，中学生は日本語でのコミュニケーションを多く取り，無難な交流で満足をする結果になった。ある中学生の感想に「小学生がかわいかった」とだけ記されていた。このような感想だけしか持ち得なかったということは「学びがなかった」ことの現れであるように思われた。(資料６参照)

小学校からの反省･感想として，乗富章子教諭からもコメントをいただいた。以下に抜粋する。(詳細は資料７参照)

小学校では授業の中に１つはsomething newがないとともに学ぶことはできない。「こう言いたいけど，どう言ったらいいの？」という思いにさせてほしかった。小学生を混乱させ，中学生がそれにアドバイスしてほしかった。

授業者がテンションを高くして臨まないといけない。小学生はいろいろな英語にも普段の授業を通して慣れてきているので，難しいものにも挑戦させてほしい。

続いて，金沢大学准教授　久保拓也先生に参観していただき，アドバイスをいただいた。以下に抜粋する。(詳細は資料７参照)

今日の授業は中学生の学びの部分において，満足できるものではなかった。中学生は自分の立場を分かっていない。ただのボランティア？ something new がないとこれからの小中連携はあり得ない。中学校は小学校の英語の実践をよく理解しておく必要がある。中学生も小学生と同じレベルの発話しかしていない。中学生にとっては学びがあったのか？

そこで，第２回交流授業へ向けての課題は，まず，小中学生どちらにとっても学びが多くある授業作りだと考えた。題材として「中学生による絵本の読み聞かせ」を取り上げ，この原稿の執筆段階で中学生が準備をしているところである。その準備を以下に記す。

(2)　第２回交流授業（10月１日）について

小学校の先生からの提案で，今回は中学生が小学生に「絵本の読み聞かせ」を行うということになった。小学校の先生が用意して下さった数冊の英語の絵本の中から４つの話を選び，それぞれ４～５人の中学生が８人程度の小学生に，グループごとにそれぞれ読み聞かせる，というものである。絵本の物語は小学生が以前にどこかで聞いて知っているものばかりで，英語が多少難しくても理解が何とかできるものである。

中学生としては前回の反省をふまえると，現状のまま絵本を読み聞かせても小学生に内容を把握させることはできないであろうと思われたので，課題意識を持たせるため，授業者から以下の話をした。

目標は「豊かな読み」を小学生に聞かせること。

小学生にわかりやすく伝えるための留意点として

[1] 原本の英語をなるべく平易なものに直す。

[2] 読みだけで分かる場面は少ないと思われるので絵を多く用いる。

[3] 絵がない場面ではジェスチャーを効果的に使用する。

[4] 読むときには大きな声で，はっきりと発音する。

また，中学生の課題として「今回は日本語使用を極力抑える。特に絵本の読み聞かせの時は基本的に全面禁止とする。例外は，どうしても日本語を挟まないと説明ができない時と，小学生の“How do you say ～ in English ?”に対する答えの時だけ。」ということを伝えた。

そして授業や休み時間，放課後の時間などを使って準備を進めていったが，読みの練習をさせていく中で，以下のような課題が挙がった。

[1] 声が思った以上に小さく，はっきりしない。自分が思っている以上に大きな声で話す必要がある。

[2] 読みが早すぎる。もっとゆっくり読む。間を長めに取る。

[3] 下をうつむきっぱなしで，聞き手の反応を見ていない。文を読み終わるごとに顔を上げ小学生が分かってるかどうかを確かめる。分かっていなければ繰り返し読む。

[4] ジェスチャーが少ない。読むので精一杯なら，他の人にジェスチャーをしてもらう。また，絵を指さすことも忘れずに行う。

現在，この紀要を執筆している段階ではこの2回目の授業はまだ行われていないので，反省点や今後の課題などは記すことはできない。今後異校種間の交流授業や，日々の実践を通してさらにコミュニケーション力，表現力が養われるよう，取り組んでいきたい。

資料　授業後の小中学生　それぞれの感想

〈中学生との英語〉

今日、5時間目に中学生との英語をしました。5時間目のためにそうじも早く終わらせてきました。私はどんな中学生といっしょに勉強するのかな？と思ってハラハラドキドキしてました。そしたら女の人はけっこう明るそうな人だったし、男の人はそんなにこわそうな人じゃなかったし、安心しました。中身は、最初はカニタニごっこ。これからむずかしくなっていくのかな。と思っていたら、ずっと最初から最後まで、カニタニだったから、ちょっと残ねんでした。中学生の前ではきんちょうして声がちいさくなってしまいました。フライド・ポテトのことをフレンチ・フライとゆうことが分かったのが、私のイコ集かくあの中まで。

今度は来年度たたかするときを聞いてすごく大変なんだろうな。と思ったことも楽しみになりました。今日はカタコトだったし、発音もあまりむずかしくなかったので、今回の英語ジョウズ、自信つきました。

資料 5

資料 6

第１回　小・中　英語　交流授業　振り返り用紙

２年＿＿＿組＿＿＿番　名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

☆今日の交流授業での感想を聞かせてください。

1．小学生に分かりやすく英語で語りかけることができましたか。	わからなそうな所を日本語訳しながら、できるかぎり英語で話しかけた。
2．小学生の英語を理解するように努めることができましたか。	発音しにくい所やぬけている部分を確にさせながら進めれた。
3．小学生をうまくリードすることができましたか。	親切に近いゆずりあってた所、しかり指名して、まよっていたらアドバイスしたりした。
4．小学校との活動で，今まで習った英語がうまく使えましたか。どんな表現を使いましたか。	That's great などのほめ言葉や Nice to meet you で話が盛り上がった。
5．小学生との活動で，難しいと感じたことはありますか。それは，何ですか。	うまく伝わらない所は少なかったけど、緊張が小学生に吹き見られて、ほぐすのが難しかった。
6．このあと，交流授業が２回ありますが，次はどのように交流したいと思いますか。	本などの話を発表したり劇みたいのもしてみでもいいと思います。
7．その他，感じたことを書いてください。	買い物と自分の要求こ日常でよく使う言葉で小学生には、知識となって中学生にとっては確にとなりました。

第１回　小・中　英語　交流授業　振り返り用紙

２年＿＿＿組＿＿＿番　名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

☆今日の交流授業での感想を聞かせてください。

1．小学生に分かりやすく英語で語りかけることができましたか。	あまりできなかった。小学生の子たちが日本語で話してるとつい私も日本語で応答してしまうことが多かった。
2．小学生の英語を理解するように努めることができましたか。	できた。I want to see ～ のところでは、See がぬけていたりしたけど、一生懸命伝えようとしてるのが伝わってきた。
3．小学生をうまくリードすることができましたか。	リードするのはほとんど司会の金子君がしてたので、私はほとんどリードすることはなかった。
4．小学校との活動で，今まで習った英語がうまく使えましたか。どんな表現を使いましたか。	よく覚えていない。でも、それほどふだんの授業で当たり前に使っていることで、それが自然になっていた。
5．小学生との活動で，難しいと感じたことはありますか。それは，何ですか。	小学生のツルセンスの間違いは分かるのだけれど、文法のことなどを良く知らない小学生にとっては説明してもわからないことが多かった。
6．このあと，交流授業が２回ありますが，次はどのように交流したいと思いますか。	日本語をなるべく減らして、英語の授業らしい授業にしたい。
7．その他，感じたことを書いてください。	小学生との授業なんて初めは、なんかいやだったけど、小学生のおかげで学べたこともあったのでよかったと思う。

第１回　小・中　英語　交流授業　振り返り用紙

２年＿＿＿組＿＿＿番　名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

☆今日の交流授業での感想を聞かせてください。

1．小学生に分かりやすく英語で語りかけることができましたか。	できたと思います。
2．小学生の英語を理解するように努めることができましたか。	はい。おんないろんな単語を知ってて、こっちがびっくりした。
3．小学生をうまくリードすることができましたか。	できたと思う。頼ってくれてうれしかった。
4．小学校との活動で，今まで習った英語がうまく使えましたか。どんな表現を使いましたか。	あまり使いませんでした。
5．小学生との活動で，難しいと感じたことはありますか。それは，何ですか。	a・anの分け方。母音がどーのどーのと説明するのはわかりづらいと思ったのでめっちゃあせりました。
6．このあと，交流授業が２回ありますが，次はどのように交流したいと思いますか。	学校探検♪ This is～や There is～の勉強ができそう!
7．その他，感じたことを書いてください。	小4はナメちゃだめですね。めっちゃたくさん単語知ってて、レベル高い。かわいかったし楽しかった♡

第１回　小・中　英語　交流授業　振り返り用紙

２年＿＿＿組＿＿＿番　名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

☆今日の交流授業での感想を聞かせてください。

1．小学生に分かりやすく英語で語りかけることができましたか。	今まで小学生が習った単語とかを使ってなるべく話しかけた。
2．小学生の英語を理解するように努めることができましたか。	文法がちがうところは大体予想していたので意味は理解できた。
3．小学生をうまくリードすることができましたか。	小学生が分からなそうにしていたら、自分がお手本になってリピートさせた。
4．小学校との活動で，今まで習った英語がうまく使えましたか。どんな表現を使いましたか。	私は店員だったので、"May I help you?" "Here you are." "You're welcome." などを使って話ができた。
5．小学生との活動で，難しいと感じたことはありますか。それは，何ですか。	小学生の声が小さい人もいたので、聞きとるのに神経を使った。
6．このあと，交流授業が２回ありますが，次はどのように交流したいと思いますか。	今回一緒なグループになれなかった人と次は交流したいと思います。
7．その他，感じたことを書いてください。	私は附属小出身ではなく、知っている人はいなかったけど楽しく話ができたのでよかったです。

資料７　７月10日の授業整理会の記録

①授業者より

交流授業をした２年選択英語では「読む」活動をメインに行っている。既に，「他学年との交流のチャンスがあるよ」と告げてあり，交流授業の少し前に小学校との交流を予告した。

自己紹介の場面では，I live in ～.などを使おうとしていたが，単純に名前の紹介のみにした。名前を逆さまにするだけだったが，小学生には予想外の（良い）反応だった。

本時の目標を示すのを忘れたことが反省。中学生には，「分かりやすく聞き手の立場に立って話そう。話し手の立場に立って聞こう。」は事前に言ってある。

授業者がしゃべりすぎた。小学生の行動を少ない指示やジェスチャーなどで導きたかった。普段の中学校での授業のように隙間の英語，指示を出してしまい，小学生に「難しい」と思わせたかもしれない。

時間配分を間違えた。

「交流がうまくいくか？」と心配していたが，がんばろうとする生徒がいた。慣れない場所でもよくやってくれた。初めての授業にもかかわらず，小学生もよくついてきてくれた。

（中学生に対し）もっといろいろな練習，買い物の発展など事前にやっておけた。

小学生の発音はきれいだと感じた。また，小学生の声がはっきり聞こえた。

②質疑応答（中：中学校教員，小：小学校教員，大：大学の先生）

（中A）力の差があるという前提で，今回の授業をやったと思うが，どうだったか。

（小川）個人差が大きかったかなと感じた。英検３級をもっている児童やカナダへ語学留学をするという児童もいた。小学生はどんどん話したい，中学生は話したくないという時期の中で，「流石，中学生！」と思わせることができなかった。

（中B）「力の差」がうまく機能していた。（中学生に対し，「教えてあげて下さい。」という指示があった。）数学の交流授業での高校生の役割は「教える役」を意識し，中学生に「高校生はすごいな！」と思わせたかった。教える側，教わる側というはっきりした位置づけ，役割をはっきりさせる方法でやった方がよい。小学生は，お店の活動で目を輝かせていたので，注文票など班の中のシートを工夫するとよい。

（中C）体育科は中高の交流授業をしたが，高校の先生との話し合いは，充分ではなかった。アイスブレーキングの大切さを感じた。今日の授業ではうまくいっており，つかみはよかった。参考になった。これが失敗すると授業がうまくいかない。A君のグループで，小学生がtoの使い方が分からなかった。小学生がA君へずけずけと話していたのがかわいそうだった。

（中D）中学生には，「日本語を使わず積極的に話す」をねらいとしたと思うが，会話は日本語がメインになっていた。I want to ～.はできていたが，コミュニケーションの中で，中学生が「どれが好き？」「もう一回言って」などを英語で言えるとかっこいいのに。他のやりとりの部分ではどうだったかな。小川先生がやっているように，中学生が小学生に英語で話そうとするという場面を見たかった。

担任をしている２年１組の生徒がやさしい顔をしているのが印象に残った。本来もっているが恥ずかしくて出していないやさしさや威厳を素直に出しやすい環境だった。下の児童・生徒に教える場面をつくっていきたい。

(小川) 普段鍛え切れていない部分が出たかも。何も言わないより日本語で話した方がよいということを生徒に伝えていたからかもしれない。

(中A) 小中交流の初の実現が成果。差があるという前提で，中学生がすごさを見せる場面があったらよかった。小川さんがやっていたモデルを中学生にやらせるとか。全部を小川さんがせずに中学生にさせてもよかった。

(小川) 当初の計画では中学生にもと思っていたが，心配で自分でやってしまった。

(中E) アイスブレーキングによってこの1時間が決まるんだなと思った。小学生が1人1文ずつ言う活動では，頷くジェスチャーをする中学生がいた一方，無反応の生徒もいた。動物を5つ選ぶ場面では，グループの雰囲気が変わった。日本語も使える場面になったからかも。中学生は，身体も自然に動き，表情もやわらかくなってきた。

(中F) 今回の初の小学校との交流では，「難しい」という感触を持った。

交流授業として，学年の違う子どもが「魚とり」をするような授業をイメージした。上の子は魚釣りを見せる，下の子は魚を見て喜んでいる，皆が楽しんでいるようなイメージ。しかし，計画的な目標が入ると途端に・・・。

小学生の実態を我々がまだ知らない。どこまで英語を知っているか。どういうことを言えば盛り上がるか。どこまで英語を入れたらよいか。文字をどこまで入れたらよいか。

中学生の立場では，新しい学びはない。心情的に推し量る力をつけてほしい。今日の授業では，中学生は，「おもしろくない」という思いではないか。小学生も中学生も満たされる授業を考えると，中学生にどこまで「教師」をさせるか，どこまで手放すかを考えていくことが課題かな。

逆転現象については，「発音の美しさ」は逆転していた。

中学生に期待していたことは，「日本語を使用せずに簡単な英語で何とか（コミュニケーションを）やっていける」。Do you want to see a panda? を生徒が使えていた。

(小) 小学校では，2人のALTとともに，担任がTTをしている。担任は個々の児童を知っているので，児童を整えるのが役割。ALTと役割分担をしている。「小学生はここまで英語を知っている」というのも担任の役割。

小学校では「英語は大変だけど，おもしろいぞ。」と思わせたいと考えている。

小学生は，I will go to ～. をやったところ。これからカナダに行く児童は，「カナダに行っても，単語しか言わなくていいから大変じゃないよ。」と言っていた。

小学生には，「今日は1つも英語で困らなかった。」という感想があった。中学校の先生が丁寧に教えたから。I / want …などばらばらに練習させていたが，I want to ～. と一続きでも大丈夫。

最後に，「自分の言葉で中学生に挨拶しなさい」と指示したが，小学校では，子どもに気づかせる，推し量らせるというふうにやっている。1つは新しいことを入れる。自己決定する。分からなければ先生や友達に聞く。Something new がないと共に学ぶことは出来ない。「こう言いたいけど，どう言ったらいいの？」という思いにさせてほしかった。小学生を混乱させて，中学生にアドバイスさせるような授業をしてほしかった。

小学生は，ALTの先生の口を見て，その形をまねて言う。先生はオーバージェスチャー，大げさにやってくれる。テンションを高くしてやらないと児童と対等にやれない。

Face the front. など，いろいろな英語に慣れている。難しいことをやってもよい。

小学生は，気づきをする。「elephant のときは，a じゃなかったな。」

（大）小川先生は，いつも素晴らしい授業をされており，尊敬している。

今日の授業はつまらなかった。中学生の学びの部分で。中学生は何を学んだのか？　中学生は自分の立場を分かっていない。教える立場？　教わる立場？　ただのボランティア？　Something new がない。これがないと，これからの小中の連携はありえない。

中学校は，小学校の英語をよく理解しておく必要がある。

「相手の立場に立って」とあるが，中学生も小学生と同じレベルの発話しかしていない。ここで，中学生にとって学びはあったのか？

誰のための，何のための交流なのかなと感じた。

このままではいけない。下に教えるということでは長くは持たない。

小学生にとても感心した。発音。「もう１回言ってごらん」と言ったとき，声が小さくなってしまったのは，残念。自信がなくなってしまったのかな。

11月には，意義のある交流授業になるような研究発表を期待しています。

整理会後の懇談より

・あるもの→分かるように簡単に伝える

・ある気持ち→分かるように簡単に伝える

→教材開発

下：「わからない！」→上に「教えて！」

上：葛藤，どうすれば教えられるか？　「分かりやすく教える」ことは難しい。

相手の言い分を取り入れながら，「分かりやすく教える」。「あいつは上手に教えられる」という同級生の学びもある。

→下からの評価→学びにつながるのでは？

上級生の学び：知的な学びは少ない　　下級生の学び：知的な学びが多い

・プライド

・うまく指示ができた

・心理的なこと

・精神的なこと

・もっとがんばらなくちゃ

（逆転現象のあったことから）

4．3年生の実践

昨年度，本学年の生徒は，「一斉授業で上の学年の選択授業」と，また「本学年選択授業と下の学年の一斉授業」の2つの異学年交流授業をしてきた。異学年交流授業によって生徒の表現力や理解力に進展が見られたが，毎日の普段の授業でも，「共に学び合う」ことを通してコミュニケーション力を高めていく必要があることに気付かされた。本校英語科では，3年生で行うスモールトークを中学校での最終的な目標として，2年生では，Paraphraseする力を身につける活動を，1年生では「沢山の表現を身につける。経験を積み重ねる。」の2つを意識した活動を行ってきた。今年度の3年生では，このスモールトークのペア活動を中心にコミュニケーション力を育成する方法を探ることにした。

(1) スモールトークの取り組み

・これまでの経緯・トピックの選び方

本校では，スモールトークの活動をしている。スモールトークとは，与えられたトピックについて，2人で即興的に会話をし，沈黙をしないで上手に会話を継続させる活動である。2年生の後半から始めており，週に1回以上のペースで進めてきた。毎回のトピックは，これまでの研究の成果から，自分の身の回りのことから，次第に外の世界へと広がりを持たせたものにしている。この活動では，広島大学教授の森敏昭先生から学んだモデリングーコーチングースキャフォールディングーフェイディングの4段階の指導法を，盛り込むことを意識した。

・友達・指導者からの学び

スモールトークは，1日に2回行うようにした。1回目は隣りの生徒と，2回目は前後または斜め前後の生徒とのペア活動である。1回目の会話で相手の使っていた有用な表現や話題の取り上げ方などを参考にして，2回目の会話に生かすことができるようにしている。また，ペア活動の後，1～2組のペアに全体の前でスモールトークを発表させ，良かった点や改善すべき点について指導者がコメントした。例えば，生徒の中に，短い応答で終わらずに1～2文を付け加えて話したり，相手の間違えた発音の単語を自分の応答の中で正しく発音して，間違えを指摘したりする姿が見られた時に全体の前で，その点を指摘し，賞賛した。また，短い言葉で相手に相槌を打ったり，相手の目を見て話したり，ジェスチャーをしたりして，会話を進めていくように注意させ，こういったCommunication strategyを知識から，実際に経験を積み重ねながら，身に付けていけるようにした。

(2) スモールトークの改善－授業とトピックとの関わり

附属高校の英語科の先生が参観の際に，このスモールトークとその時の授業の関わりが薄いことを指摘してくださった。それまでは，スモールトークを独立したものとしてとらえ，授業で扱う言語材料とスモールトークのトピックとの間に特に関連性を持たせてきていなかったので，この指摘を受け，以下のように改善を行った。

ア　スモールトークの中で既習の重要表現を使おう。

本校では，授業の始めにＢＩＮＧＯと，それを使った指導者と生徒とのＱ＆Ａ活動をしている。その際に以下のようなやりとりをした。ある日の実際の例である。

T: Have you ever played baseball?

S: Yes, I have.

T: Is it difficult for you to play baseball?

S: No, it isn't.

T: Is it interesting for you to play baseball?

S: Yes, it is!

T: It's...

S: It's interesting for me to play baseball.

続いてのスモールトークでは，In My Free Timeというトピックを与えた。そこで，最近習ったIt is ～ for － to do. の文をできるだけ使うように促した。すると，次のような会話が見られた。

S1: I read books in my free time. It's interesting for me to read books. How about you?

S2: It's interesting for me to play video games.

イ　対話練習の中でスモールトークをしよう。

各課の中にある短い対話練習の際に，いつも下の例のように続けて自由に対話（スモールトーク）を続ける活動をした。

＊教科書の対話練習コーナーLet's Tryの対話

A: This is an interesting book.（イラストには『アンネの日記』とある。）

B: Yes, it's read all over the world.

＊それに続けて生徒が自由に付け加えた対話（スモールトーク）

S1: Have you ever read this book?

S2: No, I haven't. How about you?

S1: No, I haven't.

ウ　先生の対話を聞いて，スモールトークしよう。（指導者によるモデリング）

ＡＬＴとのＴＴ（前期週１回）では，毎回日米の違いについての対話を聞き取らせる活動をしている。以前は，ＴＴの授業の日には，スモールトークをしていなかったが，聞き取りの活動とスモールトークを関係づけ，以下のように，その日の指導者の対話の話題に関連したトピックについてスモールトークの活動をさせた。

日米の違いトピック：　Given Names（名前のつけ方やミドルネームについての話題）

スモールトークのトピック：Self-Introductions

この時のスモールトークの中で見られた表現をいくつか紹介する。

・I like my first name a little.

・I was named by my grandfather.

・The part of my name is taken from my mother's name. It's (*the kanji of*) "Masa."

モデリングで指導者が使っていた表現を上手に取り入れている生徒も見られた。（下線部の表現）

・<u>What does it</u> (=this *kanji*) <u>mean?</u> I don't know. But <u>this (*kanji*) means purple.</u> My father likes purple.

・It means kind. <u>My parents want me to be kind</u>.

エ　金沢について書いてみよう。話してみよう。

スモールトークは，即興的に話す活動であるが，活動の前に書く活動やグループでの話し合いの活動を入れ，スモールトークの内容がより充実したものとなるように工夫した。また，これはその話題を話す時に必要な表現を学ぶよい機会にもなった。下の例は，それぞれ別の時間に活動させたものである。

・１時間目：書く活動（１人１人が金沢について書く。指導者が添削する。）→２時間目：グループでの話し合い（グループで金沢を紹介する文を仕上げ，黒板に示す。指導者がコメントする。）→

3時間目：金沢について書かれた文の紹介（金沢市の副読本「This is Kanazawa」から参考になる文を紹介する。）→4時間目：スモールトークの活動。

個別で書く活動では，文法的な間違いが多かったが，グループの中で，お互いの間違いを指摘し，間違いの少ない豊かな内容のまとまった文が完成した。後日，完成した文をプリントにしたものを配布し，さらに金沢市の副読本から参考になる文を紹介した後，スモールトークの活動をすると，それぞれが習得した表現を自分なりに取り入れて，スムーズに対話を行う姿が多く見られた。

この例では，スモールトークの前に書く活動を行ったが，学習する内容についてスモールトークを行ってから学習に入ることも，学習へのよい動機づけになることが考えられる。

(3) 実際のスモールトークの姿

スモールトークの後に友達の使っていた表現で，いい表現だなと思ったもの，参考になったものを書かせた。ある日のワークシートから，いくつかを紹介する。相手を励ましたり，簡単ではあるが既習の表現を使って気になることを絶妙に尋ねる文に関心を寄せている学び合う姿がここからも伺える。

トピック：High Schools

・I want to pass the exam to enter the school.

・I hope that you will pass the exam.

・I want to go to A High School because it is near my school.

・I want to go to B High School because there are many cool boys there.

・I haven't decided yet.

・Don't worry. I think you will go to C High School next spring.

・What do you think of D High School's uniform?

毎回のことであるが，次に挙げるような，どのトピックでも使える表現を取り上げる生徒もいた。繰り返しこれらの表現を聞いたり，自分で使ったりすることを通して学び合う姿が見られた。

・Please tell me more.

・I have two reasons. First,... Second,...

(4) 友達の発表ビデオをモデルとしたスピーチ活動

スモールトーク以外の活動では，発表ビデオを使った実践をした。同じ学年の選択授業で行ったスピーチの発表をビデオに録画しておき，それを一斉授業でのスピーチ発表の前にモデリングとして使用した実践である。

英語のスピーチの際，アイコンタクトや大きな声ではっきり話すことに加えて，ジェスチャーを上手に取り入れて話すことが大切である。ALTからの助言により他学年で実施した具体的なジェスチャーの講習を参考に，選択授業で特にジェスチャーに的を絞った練習を行い，発表の様子をビデオで撮影した。同様に一斉授業でもALTからの助言によりジェスチャーの講習をしてもらい，撮影してあったビデオをモデルとして示した上で，スピーチの発表を実施した。これまでもやってきたように，発表への緊張に慣れるために，「個人練習＋評価」→「ペアでの発表練習＋評価」→「グループでの発表練習＋評価」→「クラスの半分の生徒の前での発表＋評価」と段階を踏んで発表の練習をさせた。

ビデオの中の身近な友達のがんばっている姿，恥ずかしがらずに堂々とジェスチャーを取り入れている姿は他の生徒の発表への恥ずかしさや発表に対する恐怖心を低くするのに非常に役立った。発表の際には，恥ずかしがることなく，積極的にジェスチャーを取り入れる生徒の姿が目立った。教師によるモデリングよりも大きな効果が感じられた。

5．おわりに（今後の課題）

これまで2回の小学校との異校種間交流授業を行ってきたが，問題となったのは，どちらの授業も緊張した雰囲気となってしまい，なかなかそれ以外の点にまで児童･生徒の思いが至らなかった点である。また，中学生が準備したものを小学生の前で披露するだけで終わってしまい，なかなか両者に英語のコミュニケーションを伴った学びの場面をつくりきることができなかった点も問題となった。特に第1回の交流授業では，中学生の英語の学びが少ない点が問題となった。

(1) 交流授業で

今後の交流授業では，以下の点をさらに深めていく必要があると考えられる。

①他者理解力・自己表現力の情緒的な面（優しく理解する面，優しく表現する面）

・中学生が，小学生がどのくらいの発達段階であるのかを知る。

・交流授業の積み重ねや活動を共にすることを通して小中の児童，生徒が仲良くなる。

・中学生が優しく聞いてあげる，小学生の目線で表現する。

②他者理解力・自己表現力の知的な面（正しく理解する面，正しく表現する面）

・中学生が小学生の英語の力を知る。

・中学生自身が交流授業について話し合う。

・小学生のお手本，大きな興味の対象となるものを見せる準備を入念にする。

・中学生が一方的に話すのではなく，英語によるやりとりによって小学生から上手に英語を引き出しながら，活動を進める。

③教師の役割

・中学校教師が小学生をもっと知る。中学校教師が小学校で教えてみるなどの工夫が必要である。

・小学校教師が中学生を知る。

・小学校の先生が絵本の読み聞かせのこつなどを中学生に教える。

(2) 普段の授業で

交流授業の基礎となる普段の授業では以下の点を意識していかなければならないと考えられる。

①良好な人間関係を築かせ，維持していく。「どう築いていけばよいか」を学ばせる。

②誰も遠慮することなく発言し，それらを受容していくことができる「授業風土」を維持していく。「遠慮」や「緊張」を取り除く方法を学ばせる。

③アイコンタクト，ジェスチャーなど，言語以外のコミュニケーションの手段が必要となる場面を授業の中で多く設定し，継続的に実施していく。相手に，より正しく理解してもらう方法を学ばせる。

④聞く態度とともに，相手の言っていることが分からなかった時に聞き返すなど，「コミュニケーションの不成立を放置しない態度」を育成する。相手が聞き返せる雰囲気をつくる方法，相手の発話を待つ姿勢，受け入れる姿勢を学ばせる。

⑤「相手のことを思いやって聞く態度」（他者理解力の情緒的な面）とともに，「相手のことを思いやって話す態度」（自己表現力の情緒的な面）を育成する。優しくコミュニケーションする姿勢を学ばせる。

⑥情報の受け手や場面に合わせて必要な表現や語彙を習得したり，発表のための準備をしたりする。正しくコミュニケーションする方法（他者理解力・自己表現力の知的な面）を学ばせる。